



## 若い父親への手紙

—スホムリンスキーの教育実践(6)—

「私たちは、子どもたちと一緒に労働しています。そして、恐らく、すべての教育はそのことにつきるでしょう。彼ら自身、労働するということによって教育されるのです。」——人間形成における労働の意味を問いかけた論文《若い父親への手紙》(中)

(前号につづく)このために強力な教育力をもっているのが労働です。農村の生活には怠惰などあり得ないと思われるのですが、しかし残念ながら、その農村生活にさえ、無気力や怠惰がしび込んでいます。

ソホーズの立派な働き手を父母にもつ二人の子どもがいます。下の男の子が五年生で、上の女の子は六年生です。教師はその女の子に、あなたは、弟といっしょに床をふいたことがありませんか」とたずねました。「いいえ、だって、うちでは床はふかないのです。うちの床にはカーペットがひいてあるのです」という返事がかえってき

ました。この女の子も下の男の子も、二人が眠っているか、学校へ行っている間に、お母さんがカーペットをはずして、バタバタとそれをはたいて、そして床をふいていることを知らなかったのです。

アンドレイさん、私たちの社会の旗印には「働かざるもの、食うべからず」としてはされていますが、このような社会で、こうしたことが許されるのかどうか、いっしょに考えてみましょう。私たちの社会では、労働、規律、義務、品行に関する厳格な要求が、一人一人の市民の前に、さし示されています。こうした要求を遂行してこそ、個人の発達と自由も保障されるのです。子ども時代に、要求を育てるという教育がはじめられずに、どんなに腕のいい植木屋もはさみを入れようがない場合に、そういう人を大人になつてから教育し直すのはどんなに困難なことであるかは、明らかです。子ども時代に自分の欲望をコントロールす

ることを学ばず、従って、自分の欲求を道徳的に正しく、確かな根拠あるものにすることを体験したことのない人は、社会的に信頼されない人間となり、社会が求めるものと衝突するようになりませう。

子ども時代に考えもなしに消費の幸せによって育てられた人は、勉強がいになりませんが、さらに後には、もつとおそろしい不幸に、つまり、生産労働を嫌う傾向に陥ります。両者は同じ穴のムジナです。

幸福は、つかまえることのできる不思議の国の鳥などではありません。それは、建設されなければならぬ現実の建物です。私は、子どもたちの労働を広い、多面的な概念として理解しています。労働とは、肉体的、精神的諸力、意志的諸力を精一杯働かせることです。人は、その中で自己を表現し、確立し、悪に対する善の闘いにおける自分の立場を決定していくのです。

幼ない時からの労働は、第一に、最大限人間形成的なものであること、すなわち、人々と社会、人民と祖国に善をもたらそうとする意志によってふる

いたたされていること、そして第二に、労働が人の自然な状態に、つまり習慣になっていることが、何にもまして重要で。

真の幸福は、学校で学び始めると同時に、自らの労働生活を開始する人の手に入るということ。私は生活の中で何度となく確信するに至りました。労働ごっこではなく、汗にまみれ、疲れが残り、手にまめをつくり、休息と目的達成の喜びをともなう本物の労働生活だけが、人間の良心の守り手となるものです。それなしには、快適でおだやかな幸せの炎も火事になりかねません。

こういうわけで、もう何年も、労働と認識との調和ということが、私たち教師集団の大きな配慮の対象となってきました。これまで何千という人間の運命が私の目の前で形づくられていったのですが、その中で最も幸福な人（社会の目から見ても、その人の個人的な精神世界から見ても）というのは子ども時代に労働生活を始めた人たちでした。

私たちの村に、素晴らしい、そして幸福な一家が暮らしています。父親は

もたちが親思いになったのは、どのように育てあげたのでしょうか？」ピョートル・グリゴリエヴィッチは、困ったように答えました。「私たちは、子どもたちと一緒に労働しています。そして恐らく、すべての教育はそのことにつぎるでしょう。彼ら自身、労働するということによって教育されるのです。私と妻は、次のように考えています。労働——それは、最も注意深く、最も確かな母であり、また最も用心深く、最も厳格な母なのです。

この言葉には、働く人民の教育的信条の英知が表現されています。親愛なる親の皆さん、子どもの労働を恐れてはなりません。自分の子どもを労働から切り離してはなりません。子どもが、花やぶどうの樹に水をやるために小さな水の入ったバケツを、一回、二回と何度も運ぶことをそんなに心配することはありません。また、子どもが汗をかいたり、疲れたりすることをそんなに心配することはありません。子どもにとって、このような労働は、この世界のどんな喜びとも比較できないような本当の喜びなのです。この労働

においてとらえられるのは、周囲の世界だけではありません。人間は自身自身をも理解するのです。子ども時代の自己教育というものは、自分自身を知ることから始まり、この自分を知ることとは喜びにあふれたものでなければなりません。つまり、ばらの木を育てた五歳の少年は、自分の手でつくったもの——すばらしい花だけでなく、自分自身をも驚きをもって、見つめるのです。「本当にこの花をつくったのはぼくのなの？」と、子どもは、労働の幸せを他の何のものとも比較できないものであることを理解しつつ、自分自身を知るのです。そして、教育という仕事のなかで、母親や父親の友に、仲間、助手になるのです。〈子どもたちが自分自身を教育する〉——という父親の言葉をこのように理解しなければなりません。労働の中で教育という真理の意味がここにあるのです。

子どもたちが六歳から八歳になった時には、この母親は、夏には野原へ連れていきました。子どもには、母親がしていることと同じことをやりたいという要求が育ってきました。

ピョートル・グリゴリエヴィッチという名前ですが、羊の番の仕事をしています。母親は、アンナ・ペトロブナという名前ですが、農業技師として働いています。彼らの三人の子どもは学校へ通っています。十四歳のアンナは七年生を終えたところです。十二歳のペプロは五年生の生徒です。九歳のオリガは二年生の生徒です。子どもたちは、よく学んでいますし、よく労働しています。こんなことがありました。休み時間に彼女は先生に頼みました。「お願いします。私に四点をつけないで下さい。もつと勉強して五点をとれるようにしますから。私たちのところでは、大きな不幸がありました。コルホーズ農場でビートが泥にうずまりました。今、お母さんに何をしてお母さんらしいでしょうか。こんな時に、お母さんに四点をもつていっていいのでしょうか？」

ある時、両親学校の講義で、母親たちや父親たちがたずねました。「ピョートル・グリゴリエヴィッチさん、あなたは、自分の子どもをどのように教育しているのですか？あなたの子ども

子どもは、この時期にどれほど多くの新しいことを知ることができるでしょうか。朝やけ、霧深い草原、森の中の鳥の眼覚め、野原で出会った灰色のうさぎやすばしこいきつね、青空のひばりのさえずり、夏の太陽の光線の中にある冷たい泉——これらすべては、全生涯にわたって大切なものとして、忘れられぬこととして残るのです。夕方には、子どもは日焼けして疲れて感動にあふれて帰ってきます。そして荷馬車から植物の穂や茎、土や肥料の見本、本のページの間にはさんである花の入ったかばんや紙包みを家の中へ注意深く運ぶのです。これらはすべて遊びではなく、本当の労働なのです。これはまた、子ども時代の喜びでもあるのです。

八歳から十歳、時折十一歳までの年齢には夏の休暇の日には、子どもは一日中父親とともに仕事に出かけるのです。（以下次回）

（横山悦生・京都大学教育学部大学院  
杉山明男ゼミナール）